慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近世怪異小説と仏書・その二：亡婦復讐譚・食人鬼説話を中心として
Sub Title	Weird tales from the Tokugawa Period and Buddihist literature No. 2 : Centering around "The dead wife's revenge and fable of Jikininki (Ogre)"
Author	堤, 邦彦(Tsutsumi, Kunihiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1987
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.51, (1987. 7) ,p.48- 68
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00510001-0048

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近世怪異小説と仏書・その二

——亡婦復讐譚・食人鬼説話を中心として——

堤　邦彦

前　言

はじめにひとつの咄をとり挙げて、近世仏教説話の管理者にまつわる問題を掲出してみたい。

それは旅僧の見聞になる怪異譚である。僧は名を深覚房といい、高野山南蔵院の住持であった。ある時、熊野参詣をおもいたった深覚房は夜更けて山中をさまよい、猟師のひとつ家に一夜の宿をかりる。折からその家の女房が相果て、麓の親族に告げ知らせるといって亭主は山を下りる。あとには留守をあずかる深覚房と赤子を抱いた下女、そして亡婦の遺骸のみが残された。しばし経を読みまどろむうち、何やらものの鳴き声に異常を覚えて目をさますと、死んだ筈の女房が棺の中で歯をむき目を見開いてそれは凄まじい有様となっている。物に動ぜぬ法師のこと故、亡婦の造罪の程をおもいやって読誦回向し、眼を撫でふさいで再び棺の蓋を閉じてやる。旅の疲れから覚えず寝入るところに、今度は勝手の方で下女の悲鳴がひびきわたる。いかなることかと見渡せば、件の死者が食い切った下女と嬰児の生首を左右の手

に引提げ、口元を朱に染めて摑みかかってくるではないか。深覚はかたわらの屏風をとり、偈頌をとなえながら亡者を打ちすえた。たちまち亡者はその場に倒れて動かなくなる。おそるおそる二人の首とともに遺骸を棺に納め、いまや遅しと待つところに、ただならぬ気配におそわれて顔色を失なった亭主が戻ってくる。あまりの惨状に驚き、おのれの罪過を一部始終明かして懺悔するところによれば、実は赤子は亭主と下女の間にできた不義の子で、これを知った妻は夫の邪淫に瞋恚の炎をもやして妬み死んだのだという。その一念がついに悪鬼となって今宵母子の命を奪ったのであった。かくして亭主は「後世の怖れに身の毛も竦立ち、一念発起」して深覚の弟子となった。その後「道心堅固に作善の功を積みしかば、一念阿弥陀仏、即滅無量罪の功力に因って、さほどの重罪を消滅し、臨終にはめでたき往生を遂げ」た、というのがこの話の結末である。出拠は元禄十七年（宝永元）刊の怪異小説『金玉ねぢぶくさ』巻三の二で、「霊鬼人を食らふ」との章題を有する。

このような、夫と妻妾をめぐる葛藤と愛欲、そして妬婦の復讐というモチーフは、怪異小説作者にとって格好の題材であったとみえ、他にも様々な類型が見出される。例えば、この話に近いものでは、『新御伽婢子』（天和三刊）巻三の三「死後嫉妬」に、納棺の夜、亡婦が夫の手懸け者だった下女の首をとる怪異譚がみえており、やはりここでも通夜の僧が目撃者となっている。もっとも、さしあたってそれらの典拠関係を穿鑿するつもりはない。むしろ着目したいのは、こうした話の見聞者がおしなべて僧侶の身であった点にある。一体に、諸国物語形式の怪異小説において諸国行脚の僧が一話の狂言回しに位置付けられることは、すでに多くの研究者が指摘するところであり、いまさら贅言を要するまでもない。しかしながら、では何故見聞者が廻国僧でなければならぬのか、旅の木綿売りや行商人ではどうしていけないのか、あるいはまたこれらの説話群が旅僧という身分に泥んだのは何故か、ということになるといささか判然とし

ない感がある。かかる素朴な疑問に対して、従来の怪異小説研究はいまひとつ明確な解答を用意していないように思えてならない。むろん、あまりに自明のこととして何ら積極的なアプローチがなされなかったのは当然かもしれない。謡曲の世界を想起するなら、諸国一見の僧なぞ何も珍らしいものではないのだから。だが、怪異小説における仏教的素材の源泉を徳川期の唱導説法に見出そうとする本稿の主旨からすれば、事件の見聞者たる僧侶の役割りは決して等閑視し得ないのである。

その意味で、怪異譚の伝播者としての遊行聖に言及された今野達氏の論考は(一)、筆者にとって示唆にとむものであった。今野氏は『御伽物語』(別名『とのゐ草』)巻四の四「甲州の辻堂にばけものある事」およびその類型である『曾呂利物語』巻四の六、『伽婢子』巻一三の七に焦点をあわせ、出羽の口啤伝承(権斎塚由来)との比較から、これらの背景に咄を「みずからの発心由来譚に仕立てて説き回る遊行聖」の存在を推測し、『御伽物語』等の原説話が「文禄・慶長の頃よりすでに廻国遊行の徒によって、京阪地方はもとより遠く北奥の在所にまで持ち運ばれていた」との見解を示された。今野氏のいう説話管理者の介在は、特定の類型をもつ怪異譚の伝播ルートを文字化された作品間の典拠関係のみから考証したこれまでの怪異小説研究とは、根本的に異なる視角であり、かつまた、怪異談の温床を、頴原退蔵氏の指摘された「御伽衆の咄」に求めるばかりでなく、下級宗教者の話材に想定したのは卓見といえよう。

ただ、廻国聖に代表されるような口伝えによる説話の流れを文献の中から拾い上げ再現する作業には、おのずと推測の域を出ない部分も付き纏う。限られた文献資料に頼るかぎり、聖たちの消息は依然歴史の闇に鎖され、杳として分らない。

その点、近世の仏教説話についていうなら、かなり情況が異なってくる。貞享・元禄の頃から陸続と上梓された仮名

書きを主とする通俗仏書を繙けば、そこには当代説法僧の話材と評語が満載されているからである。こうした資料を手元において近世唱導界の実態を明らめることは、さして困難ではあるまい。本稿では、今野氏の後塵を拝しつつ、いま一度前出の話にたちもどり、かかる亡婦の復讐譚が説法談義の場でどのように開花していったのか、またそれは仏教怪異小説の形成にいかなる影響を及ぼしたのかといった点について、通俗仏書の所収説話をてがかりとして考究することから論をおこしたい。

(一) 亡婦の復讐をめぐって

鈴木正三の法語を聞書した片カナ本『因果物語』(寛文元刊)の巻上の六「嫉妬深女、死シテ後ノ女房ヲ取殺事付下女ヲ取殺事」は、三つの小話より成る。すなわちそれは、江戸浅草海雲寺の僧全春の亡母が継母を取殺した話(第一話)、江戸麹町にて臨終の約を違えて下女を後添えとしたため亡妻来たって下女の髪を引き抜き惨殺した話(第三話)、および第二話の次のごとき例話である。

> 奥州ニテ。去女人ノ死ケルヲ。沐浴シテ、棺ニ入テ置ケレバ。棺ノ中ヨリ、手ヲ出ケリ。人々肝ヲ消処ニ。内ノ下女、ワツ、ト云声アリ。見バ、頸ヲ引抜テアタリニナシ。不審シテ、棺ヲ披テ見バ。死人、彼ノ女ノ頸ヲ抱。喰付テ居タリ。是、日比妬シ念力ノ作処也。愚道和尚。若時見タル、ト、語玉フ也。
>
> (『仮名草子集成』四による。以下同)

一読してわかるとおり、右は上述の『金玉ねぢぶくさ』や『新御伽婢子』の素型ともいうべき内容である。ただ、同

時に忘れてならぬのは、そうした怪異小説とは趣を異にする、片カナ本の仏書(説教書)としての特質である。すなわち片カナ本の説教種本的性格(2)を考え合わせるなら、要点のみをしるした右の一条が様々な潤色を加えられて談義の俎上にのせられ、聴衆にまのあたりなる因果の理を訴えかけたとみてよいだろう。その際、一条中の「愚道和尚」が事件の実見者となって咄の真憑性を一層確かなものにしたであろうことは想像に難くない。あるいはこうした僧侶の見聞を咄の根幹にすえる叙述態度こそは、前代から引きつづいた廻国聖の咄の伝統に根ざすものではなかったか。もちろん正三法語が、おのれの身の上に起きた因縁咄を語り歩いた廻国遊行の語り口と、全く同質であったとみることはできまい。正三のみならず、近世の説法僧たちは必ずしも自己の体験に仮託するのではなく、むしろ身近な見聞や伝聞による出所正しき咄を弘法布教の材とするのが常であった。戦国末から幕初にかけて激増した近世寺院の多くが、その地に来訪した廻国聖の土着化によって開創されたものであること(3)に鑑み、それら寺壇を布教の場とした徳川期の説法談義が、諸国をさすらう旅の境涯とは無縁の、より日常的で民衆生活に密着した在地性の強い教戒に移行していったのは、当然のなりゆきであったろう。だが、そうはいっても、彼らの話材が基本的には廻国聖のそれを概ね継承していたこともまた事実であろう。見聞者としての僧を加え、事実性を強調する方法自体が、前代との連続性を示しているとも思われる。他方旅の僧が一奇事の実体験者から見聞者にすりかわったところに、唱導説法の近世的有り方を認めることもできよう。

ともあれ、中世以来の咄の伝統の中に育成した近世仏教怪異譚の数々が、壇家制度という幕府公認の社会機構の中で仏家と民衆との接点を保ちつづけ、さらに説教のエッセンスをあつめた種本的書物が板本となって流布しつつ、近世の仏教説話群を形成していったことは見逃せない。片カナ本『因果物語』はそうした説教種本の典型であり、かつまた巻

上の六の第二話は、説教の場における妬婦復讐譚のひとつの定型を示しているとみてよかろう。とりあえず、ここでは、怪異小説に顕現する〈亡婦の復讐〉が、近世初頭の頃、早くも説法話材となって流布していたことを了解しておきたい。

唱導話材としての特質を如実にあらわす別の事例をとりあげてみよう。元禄六年刊『鑛石集』は真言宗の説教僧蓮体の編んだ仏教説話集である。各所より蒐集した説話を「講説唱導ノ人」のためにまとめたもので(4)、従って、本書の所収説話は当代説法の実態を今日に伝えると考えて差し支えない。その巻三末の二「大坂ノ女生身ニ人ノ妻ヲ嗾殺セル事」の章末に次の付話がみえる。

又摂州六甲ノ郡ニ、或人、本妻アルニ、傍ニ妾ヲ持ケリ。妾、事ノ外ニ嫉妬深クテ、後ニハ病テ終ニ死ス。其ノ死骸、本妻ノ亢ニ食付テ殺ケリ。無下ニ近キ事ナレバ、夫ノ名ヲ斥ズ。左右癡愛ノ執、嫉妬ノ念ホド恐ロシキハアラジ。慎マズンバアルベカラズ。

（国会図書館蔵本により句読点を補う）

ここには、妻妾の立場を逆転し、見聞者を省くなど、かなり自由な咄の展開がみられるものの、基本的には亡婦復讐譚のバリエーションであり、近年の異聞によって「嫉妬ノ念」のおそるべきことを例証したものといえる。

蓮体の布教活動の詳細は、直筆日記をもとにその伝をまとめた上田照遍編『蓮体和尚行状記(5)』によって大略を知り得る。同書によれば、寛文三年河内国清水村に生まれ享保十一年六十四歳で遷化するまで諸国をめぐって民衆教化につとめたという。ことに元禄十年、三十五歳の時、播磨の密蔵院で二教論を講じて以来、各地を訪れて講説布教の日々

を過ごしたことがうかがえる。その足跡は畿内はもとより、備中(元禄一〇)、江戸(同一四)、讃岐・淡路(宝永二)、阿波・伊予(同四)、安芸(同八)、備後(正徳五)、高松・岡山(享保四)、紀州(同一〇)のごとく広範囲におよび、集まった聴衆の数も数千数万に達したという。試みに数例を『行状記』に求めると、

聴衆は僧尼三百余人、俗衆一千、二千乃至五千人。(宝永二年四月、淡路にて)

於当国池原村講因果経。十六座。僧衆。俗衆。都て一千余人。二千。三千。(同四年七月、河内)

備後福山南寿山観音寺に於て。即身義。並に理趣経を講ず。印可を授く三千人。菩薩戒を授く百六十人。(正徳五年三月福山)

行結縁灌頂。入壇者一万六千人。(享保四年正月、大阪)

行結縁灌頂。入壇一万四千五百九十五人。(同四月、岡山)

といった具合に法談の盛況が伝えられている。また、説法のほとんどが各地の寺院で行なわれているが、なかには

東野村上田源左衛門宅に於て。講地蔵本願経。十六座。縮素一千。二千。三千。(正徳三年三月、河内)

於森谷村東条作右衛門宅。橋供養説法。三座。(享保九年八月、同)

等個人宅において講ぜられた記事もみえ、俗徒との深い関わりを教えている。鎌倉期以後の新興仏教が、説教の多用によって娯楽を望む庶民の欲求に答え、俗耳に入り易い譬喩因縁譚に傾いていったことは、つとに関山和夫氏の指摘されるところ(7)であるが、そのような事情は徳川期にあってもほぼ同様であったろう。蓮体の場合も、おそらく講説の合間に種々の因縁譚を語り、教化のてだてとしたものと思われる。かかる弘法布教の実際に即して編纂されたのが『鑛

石集』だったわけで、従って前掲の復讐譚が男女の妄執と女人の妬毒を戒める引証となって衆生の耳を濯いだことは十分に考え得るのである。

説法僧がかくのごとき話材を用いたことは、『新撰発心伝』（元文六刊）巻上「因二亡妻之恨一発心」や『本朝新因縁集』（宝歴四序、安永六刊）巻三「女人ノ執心鼠ト成テ夫ヲ殺ス事」などに隠見するが、近年中期以降の諸作には、さらに複雑なストーリーと読み物性を具備した内容が看取される。天明八年刊『近代見聞善悪業報因縁集』巻三に収められた「入棺せし亡婦顕れ出て怨ある人の首を取し事」はその好例といえよう。本章は、宝暦年中に尾州名古屋より京の本山に上った真宗の僧知礼の若き日の見聞による怪異譚で、名古屋郊外の久保田村が舞台となっている。ある時某家の妻が死去し、知礼は亡婦の通夜をつとめることとなる。ところが、深更におよんで棺の内より異様な声が響きわたる。本文は一人称の話り口で以下のようにつづく。

若火車の障か。又ハ狐狸の故にやと伺ふ処に。棺の蓋を内より明んとす。拙僧手を以て押しに。棺の内より厳く明んとす。予も力一ぱい出し押けれども力なまけて。終に棺の内より蓋をはね飛し。中に亡妻すっくと立と。燈もさっぱりと一度に吹消して。棺を出て台所の方へそろ〳〵と行躰。別に小座敷あり。其内に亭主と妾と両人寝て居る処へ行と見えけるが。やがて小座敷へ入て。只一声きやっといふ。其内にあかりなき故。家内の者を呼起し。燈明を燃させ置処に。かの亡者棺へ戻し容ハ。両の手に男女の首をひっさげ。棺中に仁王立にすっくと立て。両眼を見開し容ハ。さながら生る人の如し。予も若年ゆへ怖しく。左右なく伏倒れぬ。暫有て家内の者に此旨を知らせければ。皆々騒立けり。小座敷の寝所へ行て見れバ。亭主と妾との首なき故大騒なり。亡妻ハ両人の首提。双眼を怒らし。にらみ廻して立たる容ハ。恐ろしとも何とも中々詞にハ述がたし。拙僧も心取直し。彼が持たる首を取んとするに。持堅し一念にて。中々放す事にあらず。仍て先誦経して。先より亡者に示しけるハ。汝嫉妬の悪念を凝

し。両人を殺害せし其罪によって。無間地獄へ堕し。永く苦を受べし。汝予が申に随ひ。如来の本願にすがる思せよ。予称名念仏せんと。目を閉て声高く。一心に称名念仏申けれバ。今迄にらミ詰し双眼を忽閉て。持たる二の首を棺の中へ落し捨て。元の如くに倒て死躰と成ぬ。(略)四方にても女の嫉妬の念にて。人を喰殺事儘多し。惣じて女にハこの念止ざる者故。依て灵場の地にハ女人結界あつて。参詣叶ぬ所。本朝に四十八ケ所有とかや。然れバ女人たらバ恥辱の第一なれバ。慎敬て過を懺悔して。仏果菩提を願ふべき事肝要也。

(東洋大学哲学堂文庫蔵本による)

要点のみを記した片カナ本『因果物語』や『鑛石集』に比べ、右はまさに仏教説話の名に値するような質量ともに密度の濃い内容となっている。また一方では、悪鬼を得脱せしめた称名念仏の功徳を描き加えることを忘れず。唱導材としての性格をも明確にあらわしているのである。ちなみに、本書は各章末に編者採璞の評釈を付すが、この話のあとにも本篇を評して

仏の御心に一切衆生を毛頭斗も悪しとハ思ひ給はねバ。瞋恚といふ事なし。そこにすがる事なれバ。瞋恚ハ止事に極る。瞋恚が止し故。持堅し二の首を放し捨たりと見ゆ。知礼がわれ称名念仏せんとて。生仏不二を覚り玉ふ御名を唱られしも。有難き方便なり。知礼の唱られし仏名が。亡婦がすがる思と一致なれバ。瞋恚ハ止むはづの事なり。此善業道によりて。次の生の往生かなはずとも。第三の生ハ決して往生極楽と思ひ知べし。

のごとき教戒が添えられ、まさしく紙上説法の様相を呈している。つまり、編者は説話の背後に仏法称揚の意図を周到に用意しているのであって、死者の返報という猟奇な怪異譚を語りながらも、真の目的は当然仏法唱導にあったといえるのである。この一点において、細部に至るまでの酷似はあれども、『金玉ねぢぶくさ』の一章とは異なる編者の姿

勢、叙述態度をうかがい知ることができよう。

以上、片カナ本『因果物語』から『善悪業報因縁集』までの、仏書に散見する亡婦の復讐を略述してみたが、こうした妬婦譚をテーマにすえた唱導説話を発生母体として、『新御伽婢子』や『金玉ねぢぶくさ』の仏教怪異譚が創出された点に重ねて留意しておきたい。さらに近世怪異小説全体を展望していうなら、怪談作者たちがあれほどまでに仏教教理と不可分な話題――発心、往生、蘇生、転生、殺生、廻国等々を好み、もろもろの因果応報譚、因縁譚、霊験譚に傾斜していったのは(8)、徳川治政下における、説教台本の板行を含めた、説法談義の盛行と深く関わる社会的事象の反映だったと考えられるのである。

(二) 妬婦譚の叙述形式

怪異小説が同時代の説法談義から学び得たものは、素材のみならず、あるテーマを語る際の叙述形式にもおよんでいる。前章までの論述に関連していうなら、西村本怪異小説『御伽比丘尼』(貞享四刊)巻二の三などに顕著な「妬婦」と「不嫉の賢女」の対置といった説話配列は、説法僧の話法に通ずる構成方法といえるだろう。

本章は「恨(うらみ)に消し露の命付葎がのべの女鬼」との章題をもち、京都吉田山のほとりにて鬼のごとき面体で狂死した「天性物ねたみふか」き女の奇談となっている。女は上京の「何かしの民部」の妻で、夫の妾狂いを恨んで狂乱し、ついに絶命したものだった。その後「四五日を経て民部も妾も心ち煩しくなりてむなしくな」り、家名も絶えてしまったという。このような妬婦の悶死と返報を評する形で、作者は左の付言を設けている。

伝きく唐の鮑蘇が妻の。物ねたむ心なく。いたつて賢なる女なりしかば。帝より女宗といふ官をなし給ひしと我朝にも大内の義隆公忍びてかよひ給ふ女房あり彼かたへせうそこをつかはさるゝに。つかひの女あやまりて御台所へ参らせあげぬ。みだい御らんありて

頼なよ行すゑかけてかはらしと我にもいひしことの葉の末

とたんざくに遊ばし女のかたへ送り給ひ又よしたか公へも

かよふかたふたつありそのはまちどりふみたがへたる跡とこそ見れ

とよみ送り給ひしに。女いとはぢらひて御いとま申出てげればよしたか公も此のちわりなくかたらひおはしけるとかや。かく貞なる心ざし迄杜はあらさらめ浅ましくもまよひけめといと哀也。

（『西村本小説全集』下巻による）

鮑蘇の妻の故事は享年十六年刊『勧化因縁女人往生聞書鼓吹』（南溟編）巻一の一四「鮑蘇ヵ妻無二妬忌心一事」（出典は『蒙求』）等に引かれ唱導材化していたことが知られるが、仏書以外にも『鑑草』巻之三「不嫉妬毒報」など諸書にみえており、むしろ一般的話題であったとみた方がよい。説話のポピュラリティという意味では、大内義隆の妻の逸話についても等しく、怪異小説では浅井了意『狗張子』巻三の五に類型をみる。ただし、それぞれの話が周知のものであるにしても、妬毒に狂う女の話に鮑蘇や義隆の妻を配して不嫉妬の徳を説こうとする態度は、やはり唱導説法の常套であったらしい。例えば蓮体編『観音冥応集』（宝永元序、同三刊）巻四に収められた一群の妬婦譚である。ここでは延宝六年の実見譚という巻四の七「女ノ嫉妬故ニ崇リヲ作ヲ真言ヲ誦シテ攘除ク事」につづけて巻四の八「光明真言ヲ誦シテ鬼病ヲ治スル事」の付話に備前某の妻が死してのち夫の妾に霊異をなし髪を引き抜いて苦しめたことを載せ(9)「女人ノ嫉妬程。可畏モノハナシ」云々との釈言を述べるが、注視すべきは、次の巻四の九「嫉妬ナキ人ノ事」の条下に「義隆ノ妻

貞子」にまつわる歌徳説話を引き、「古今希有ノ女人」の淑徳を賞して前章までの物ねたみの妻妾らに比況している点である。あるいはまた、享保十三年刊『勧善懲悪集』巻六には「嫉妬不嫉妬ノ部」といった部立の立て方がみえ、これらの話が妬婦・貞女という対応のもとに語られていたことをほのめかしている。

他方、西村本についていうと、『御伽比丘尼』巻二の三以外にも、『新御伽婢子』巻三の五「両妻夫割」のように、本話に妬み合う妻妾を描き付話に『大和物語』158段等で知られる「うらみたるけしき」なき優しき女を置く結構が見出される。こうした叙述形式は、じつはそれが当代唱導の影響下に案出されたものではなかったかということを大いに想像させる。

ちなみに、西村本怪異小説には、如上の事例に加えて、説法話材から出たとみられる話柄が少なくない。例していえば、『新御伽婢子』巻五の六「一念闇夜行」の同型説話が前出『鑛石集』巻三末「大坂ノ女生身ニ人ノ妻ヲ噉殺セル事」の第二話にみえ、同書巻三の九「血滴成小蛇」が『因果物語』をはじめ諸仏書に展開する蛇道心説話のバリエーションであるなど(10)、説法話材への意図的接近が目につく。この他、入定者の奇瑞を描いた『宗祇諸国物語』巻一の七「屍哭ニ不浄ニ」、霊地霊場の聖なることを述べる同書巻二の三「登ニ高野ニ五障雲」や『新御伽婢子』巻四の三「金峰崇」、唱導材的側面をもつ阿曾沼伝説に着想した同書巻二の九「雁塚昔」、やはり宗教者の介在を推定し得る歌い骸骨型昔話の翻案である同巻一の四「髑髏言」等、そのような傾向の見受けられる章段に関しては、稿をあらため考究したい。

(三) 食人鬼説話の展開

弔いの席に居あわせた旅の僧が怪奇な事件に接し、死霊の救済もしくは関係者の発心遁世を助けるという亡婦復讐譚

の基本構造は、所謂食人鬼にまつわる怪異譚においても同断であり、発生源の近しさを想察させるものがある。食人鬼のことは『観音義疏記会本』巻二に「羅刹、是食人鬼、人屍若臭、能呪養レ之令レ鮮」とみえ、また通俗仏書にも

食人鬼ト云ハ人ノ屍ヲクラヒ若臭ケレバ能呪メ是食フ。復人ノ精気ヲ噉フ鬼ナリ

（元禄十年刊『延命地蔵菩薩経直談鈔』巻七の三二）

のごとき条々があって、説法僧には親しい素材であったと思われる。壬生派の念仏聖了智の編になる(1)『緇白往生伝』（元禄二刊）巻中「上人信誉」の項は、そうした経典知識の唱導材化ともいうべき内容である。梗概を示そう。

それは信誉上人諸国遊歴の頃のことであった。たまたま上洛の機会あって、京へ上る道すがらさる家に一夜の宿を求める。ちょうどその日、宿の女房が亡くなり、壇那寺の僧を呼びに行く間、上人が通夜をつとめることとなる。ややあって一人の僧が忽然と現われ「出レ舌」死者を舐めはじめた。驚き見まもるところへ亭主が寺僧を連れて戻ってくる。見ればそれは先刻の僧に間違いない。「彼先来僧者、恐此僧強盛貪念最可レ悲、可レ痛此事也」と悟って寺僧にありのままを告げると、彼の僧も「深生三慚愧心一、向二上人一発露懺悔」した。このことを契機として、上人もますます道心を堅固にし「真隠」の境地に至った。（原文は『近世往生伝集成』一）

廻国僧の見聞、通夜の晩という設定、たしかにそれらは亡婦復讐譚に等しいモチーフである。ただ、食人鬼説話の場合の力点は、薙染の身にありながらみずからの貪欲邪心故に忌まわしき悪鬼の姿をうつつに現ずること、そしてそれが懺悔、堅信や発心遁世の機縁となったことを詳らかにする点にあったようだ。

蓮盛編『勧化本朝新因縁集』巻五の「無慚ノ僧屍ヲ食フ事」もそのような意図の検証される一条である。

関東のある禅寺で壇家の老婆が死に、遺骸を廟所に葬ったのち、初七日を迎えることとなった。その前夜、寺僧の夢に悪鬼が現われ、墓原へ引立てる。そして老婆の塚を暴くと無理矢理に屍肉を食わせた。目覚めてもなお口中生臭く、心地悪さに翌日は斎会に行くこともできず臥して居た。隣房の僧が様子を見に行くと、寺僧の口が血に染まっている。不思議の念を抱いて廟所を検めると卒都婆、香花が踏み荒され屍体も喰ひちらかされていた。夢に違わぬ有り様にあきれはて、かくして「寺ニ在モ恥カシクヤ覚ヘケン、又ハ此縁ニテ発心厭離ヤシタリケン、二人共ニ忍出テ、行方ナクナ」ったという。(龍谷大学図書館蔵本による。読点筆者)

本文の末には「此亡者ニヨリテ斎非時ヲ貪ボル心フカヽリケル故ナルベシ」との識見が付されており、『縊白往生伝』と同じく貪婪強欲の心が僧をして屍を喰う悪鬼に変化せしめたことを骨子としている。また、発心譚的色彩が濃い点においても、『縊白往生伝』に共通する筆法といえるだろう。すなわち整理すると、説法話材に組み込まれた食人鬼説話のモチーフには、僧の貪念、夢中の食人、発心・懺悔(又は堅信)の因縁、そして事件の見聞者たる旅僧の通夜等々の要素が見出されるのである。誤謬をおそれずにいえば、『縊白往生伝』『本朝新因縁集』等は氷山の一角であり、文字化されて今日に残ったそれらの向こう側に、多くの食人説話が、かかる諸要素を自由に取り入れ取捨しながら弘法布教の具となって口踊されていたのではないか。

かく考えてみてすぐに思いうかぶのは、片カナ本『因果物語』下巻一七「人ノ魂死人ヲ喰事付精魂寺エ来事」の第一話である。正三の手元に書き留められた本条も、おそらくは説法の場に流布伝播した食人鬼説話の一体だったろう。原文はこうある。

山城ヨリ。丹波へ行路ノ。履掛ト云所ニ。太郎兵衛ト云者京四条ノ多葉粉刻喜右衛門ト云者。近付ニテ、恒々出入ス。或時、履掛ヨリ京へ行トテ、桂川ヲ渡レバ。頓テ、廟処有。死人ヲ捨置タリ。見バ、喜右衛門、日比癩病気ナルカ。彼死人ヲ、小刀ニテ切テ、喰居タリ。扨、不思議也ト、思、行ケレバ。案ノ外、喜右衛門ワ家ニ伏テ居ル。起テ対面スレバ。喜右衛門、不思議ナル夢ヲ見タリ、ト、云。何事ゾ、ト、問バ。桂川ノ渡ニテ。死人ヲ喰テ、口ノ腥事限無、ト、云。太郎兵衛、其ニテ。有ノ儘ニ語ケレバ。喜右衛門、聞テ驚。浅間敷コト哉ト、思。髪ヲ剃、家ヲ捨。発心シテ後、癩病モ。大形能成、乞食シケリ。彼太郎兵衛モ、道心ヲ発、慈悲ヲ専トシテ、不断念仏セシ、ト、也。太郎兵衛、直ニ語ヲ聞テ、野尻万助ト云人、一心ト云禅内ニ為テ、慥ニ語ヲ、寛永十八年ノ霜月ニ聞也。

ここでは狂言回しとしての旅僧や、仏者の食人等のモチーフが捨象され、一見別系統の話とも見受けられるが、しかし夢中に人を喰うことでは一連の食人鬼説話に等しく、そしてなによりも喜右衛門の剃髪・出家・発心を記し、一度は食人鬼と化した癩者の業病平癒におよんだのは、まさしく唱導話材としての平仄を合わせた構成といえよう。要するに、説法談義における食人鬼説話の目的は、かくのごとき因縁を通してあさましき罪業に堕せる者の悔悟と求道を物語り、俗衆勧化の一助とするところにあったわけである。その意味では、片カナ本の食人鬼説話は説法の場に固着した話柄であるとみてよい。

なお、片カナ本の当該説話は了意編の平かな本巻三の一一「魂とび行て屍をくらひける事」に材を提供するが、同じく了意『盂蘭盆経新記直談』(延宝六序、元禄一六刊)巻一六の二三「食二人肉一飲二人血一事実」に正法念経一七に拠る食人鬼の説がみえており、そうした経典の説法話材化が平かな本巻三の一一であることが了解される。

ところで、ここでひるがえって近世小説史に即しつつ食人鬼説話の展開を鳥瞰するなら、唱導説法とは全く別の性質を有する一群が属目される。そのひとつ寛文十年以前の板行と目される『曾呂利物語』巻一の七「罪ふかきもの今生より業をさらす事」に関していえば、話型そのものは『因果物語』の祖述とみてよい。

宮古北野近うに慳貪なる女あり。まことに善根なる心ざしは露ほども無うして、悪業は須弥の巓にも越えつべし。さるつれあひの男、用の事有りて一條戻橋の辺を、暁方に通りしが、橋の下に死人の有りけるを、老女が引き裂き〳〵食ひけるを、よく〳〵見れば我が子の母なり。不思議といふも愚かにて、急ぎ我が屋に立ちかへり、母のいまだ臥して有るを起しければ、驚き起きあがりて、「さてさておそろしき夢を見つる中に、嬉しくもおこさせ給ふものかな。」といふ。「いかなる夢を見給ひつる。」と問へば、橋の下に死人のあるを引きさきて食ふと思ひしが、夢心にもこは浅ましきことかなと思ひながらも、食ふは嬉しき心地ぞかし。」といふ。程なく彼のもの身まかりけるが、今生の罪業深かりしば、来世はさこそと思ひやるさへ不便なり。（『近代日本文学大系』13）

右の話はほとんどそのまま延宝五年刊『諸国百物語』巻一の五「木屋の助五郎が母夢に死人をくひける事」に継承されており、怪異小説のなかに食人鬼説話の系譜が形作られて行く過程が看取される。こうした類型は、その延長上に上田秋成『雨月物語』の「青頭巾」や小泉八雲描くところの「食人鬼」（『怪談』所載）などを派生することとなる。

ところで、『曾呂利物語』や『諸国百物語』を通覧して気付くのは、話の結末が貪女の死によって結ばれるのみで、発心遁世譚への発展が認められないことである。つまり作者の興味は、貪女の悟道、入信ではなく、夢中に屍を喰う奇談を描くところにあるわけで、そこに宗教性の後退と怪異小説としての新たな視点を見出し得るのである。かくのごとく初期の仏教怪異小説の多くは、唱導界との間に有形無形の係累を保ちながらも、すでに虚構性・文芸性を優先させる

独自の方向を模索しはじめていたのであった。

(四) 結びにかえて——仏書の中の怪異小説

怪異小説と仏書の関係に言及する時、これまで述べたような唱導材→怪異小説といった影響関係だけからでは論じられない局面が存する点にもふれておかねばなるまい。すなわち元禄・享保頃を境として、説法僧の話材に怪異小説からの逆移入が顕現しはじめるのである。享保十九年の写本『因縁集』に平かな本『因果物語』より一話、『御伽物語』より二話、『伽婢子』より六話の原文に忠実な引用がみえ(12)、元禄八年刊『七観音三十三身霊験鈔』等七種の仏書に片カナ・平かな両『因果物語』の流用を指摘し得ること(13)は、つとに述べたとおりであるが、この他管見に入ったものでは、前掲南溟の『勧化因縁女人往生聞書鼓吹』巻二の一七「破戒僧生入地獄事」が片カナ本『因果物語』上巻四の一(平かな本巻三の一七)に拠り、同じく『野客問話』(寛保三刊)第五十九「問小説」に『薄雪物語』への論評がうかがえる。なお、前者には中国志怪小説『剪燈新話』の利用がみえ、説法話材の多様化を教えている。

一方、こうした、怪異小説の本文自体を引証とする直接的な依拠のみならず、一部には原話の筋立てや趣向を教化の内容にあわせて自在に換骨奪胎し自家の法談に転ずる作意さえ見受けられる。そのあたりの詳細を越中の浄土僧龍正の撰した『勧化一声電』(宝暦十年刊)に求めてみよう。本書中巻には、大阪の話として、金子の紛失と疑いをかけられた者の気概が巷談風につづられている。こうした題材は、早くは『西鶴諸国はなし』(貞享二刊)巻一の七「大晦日は合はぬ算用」に素型を見出し得るが、他方、近世中期の浮世草子につけば、『一声電』にきわめて近い発想が認められる。宝永二年刊『御伽人形』巻一の七「金鞘さしつめる窄人」がそれである。いま両者のあらましを対応させると次のよう

になる。

『御伽人形』一の七

浪人熊本文太左衛門、京嵯峨野に隠棲し九平治となのる。

ある時、米屋吉兵衛方にて念仏講。

仏壇の中の十両紛失。

九平治に嫌疑。

侍の一分たたずとて娘を廓に売って十両を苦面。喜兵衛と刺し交える覚悟。

そこへ喜兵衛の息子かけつけ、金子は戸棚の中にありという。

一同様々に言いなだめ娘を請け出して喜三郎と夫婦にし、一家末長く繁盛。

『一声電』はこれにつづけて評と法話を載せ、疑心持つべからずと説く。つまり、もともと市井の人情咄として描かれた『御伽人形』の一話が、説法僧の手によってみごとに唱導材化したわけである。そうした観点から本書は近世中期の唱導界における小説利用を如実に示すものといえるだろう。

かかる傾向は長編の仏教説話集に一層明瞭にあらわれている。宝暦十一年刊『勧化西院河原口号伝』(五巻五冊、章瑞編)

『勧化一声電』

電大阪の実話。

ある家の金子五十両が紛失。

前日その家に居た同行の男に疑いがかかる。

男は罪を認めて五十両を返す。

主の息子帰宅。金は商用で持ち出した由。

同行の持参した五十両は娘を廓に売った金。

主は詫びるが、同行は決して金を受けとらない。

結局娘を請け出して息子の嫁とし、一生安楽に暮らせさた。

はその証左である。

時は天慶の頃。京都西院の侍立花藤太重信は妻好女と妾者の林をめぐる情事の果てに林を殺害。蛇体と化した林の一念に苛まれる。(巻一、巻二)発心遁世して高野山に逃れた重信は、山内で林の弟空岩法師に対面する。一方、林の父平蔵は箱根にて娘の霊より非業の死の次第を知らされ、高野山を下った敵重信を討つ。(巻三)そのうち平蔵は出家して空也上人の弟子となり、眼前に西院河原の地獄をみる。(巻四)尼となった好女、空也に会う。地蔵供養の功徳で林と重信は冥途を出て京に生まれかわる。(巻五)

本書は空也上人の一代記などと関連をもつ長編時代物で、文学史的には初期読本の発生に関わる興味深い問題を内包しているが、同時に、怪異小説や先行仏教説話の摂取という点で極立つ特色をみせている。すなわち巻二の四「林女西院河原ニ死骸ヲ試ム」で、死体を橋のかわりにしてまで闇夜の川を渡り自分のもとに通う林の執念に怖じた重信が、それ以後林を遠ざけた、とあるのは、明らかに『御伽物語』巻四の六「女は天性肝ふとき事」に拠るものであろうし、巻二の六「林女櫓岸野ニ殺サル」、巻二の七「怨念蛇トナリ藤太ヲ纏」、巻三の一「藤太高野ニ入道ス」、巻三の三「蛇再ビ重信ヲ纏」の各段は、片カナ本『因果物語』上巻の五の二をはじめとする蛇道心説話(14)をふまえた筋立てとみなし得る。また、巻三の二「重信空岩ニ値テ下山ス」は所謂荒五郎発心譚(15)を、巻三の四「平蔵箱根ニテ娘ニ値」は箱根の地獄にて死者に対面する話に材を得たものとみてよい。

このように複数の素材を下敷きとして、蛇難、発心、敵討等の挿話がつづられ、『口号伝』の一篇が成立したのであった。そしてまた各々の事件を巻四・五に描く空也上人の善導と廻獄、地蔵供養による亡者の救済といった宗教的大円団に結ぼうとする作意が、『口号伝』全体を覆っているのである。

かくして、先行怪異譚の再生をはじめとする新趣向の獲得により、これら宝暦期の通俗仏書は、近世初頭の説教種本に比べ、はるかに豊かなストーリー性と内容の緻密さを具えるようになって行った。このことは説法談義そのものの質的変化を受けた動きだったのかもしれない。当時の説法僧たちの派手な語り方を「歌舞伎もののこなしをまねつつ……得手勝手なるかたに説こかし」（『癇癖談』上）などと扱き下ろしたのは上田秋成ただ一人ではなかった。仏者の間にも近年の雑芸まがいの説法に対する批判と自省が渦巻いていたのである（『野客間話』巻五の五七等）。

もっとも、かような仏教界の動向がいかなる功罪をもたらしたか、ということはさしあたっての問題ではない。むしろ、そうした説法僧たちのいささか大仰な布教活動が結果的には『口号伝』のような小説的芳香さえにおわせる仏教説話集に収斂していったことを重視すべきではないか。少なくとも怪異小説のごとき狂言綺語の世界が再度説法の場に吸収されて行った事実だけは記憶にとどめておきたい。仏教怪異譚の発生と変遷は、仏書と怪異小説の相互交絡という視座を得て、はじめてその全貌をあらわすことになるのだから。

（未完）

［注］

（1）「遊士権斎の回国と近世怪異譚」（『専修国文』24、昭54）。なお室町期の縁起や因縁譚が勧進聖の管理下にあったことについては徳田和夫氏「勧進聖と社寺縁起―室町期を中心として」（『国文学研究資料館紀要』4、昭53・3）などがある。

（2）中村幸彦氏「仮名草子の説話性」（昭和48『近世小説史の研究』所収）檜谷昭彦氏『井原西鶴研究』（昭54）第三部、江本裕氏「『因果物語』をめぐる諸問題―片仮名本検討をとおして」（『大妻国文』11、昭55・3）など。なお片カナ本上の六は平かな本に未転用の話である。

（3）竹田聴州氏「近世社会と仏教」（岩波講座日本歴史9）

（4）外村展子氏「『鑛石集』について」（『説話』7、昭58・8）

(5) 『真言安心全書』(大正2)所収。引用は同書による。
(6) なお『観音冥応集』自序に「曾テ普門ヲ講ズル事六回。地蔵経ヲ談ズル事七回」などとあり、蓮体の講説にふれている。
(7) 『説教の歴史的研究』(昭48、法蔵館)。
(8) 怪異小説と唱導材の関係については拙稿「近世怪異小説と仏書・その一」(『芸文研究』47、昭60・12)に若干ふれるところがあった。
(9) こうした話型は片カナ本『因果物語』巻上の六の三に通ずるものでもある。
(10) 拙稿「『因果物語』蛇道心説話をめぐって—唱導と文芸の間」(『近世文芸』43、昭60・11)。
(11) 伊藤唯真氏「往生伝と浄土伝燈の史論解説」(『浄土宗典籍研究』昭50)
(12) 拙稿「『御伽人形』考—初期怪異小説のゆくえ」(『木野評論』15、昭59・3)
(13) 注10に同。
(14) 注10に同。
(15) 怪異小説では『狗張子』巻二の一、仏書では『女人往生聞書鼓吹』巻三の六、『勧化因縁弁談集』巻三に荒五郎発心の類型がみえる。

(付記) 小稿をなすにあたり資料の閲覧を許された各図書館・研究室に深謝申し上げる。